

ミシンでできた建築

アリアンツ・アリーナ

にわかサッカーファンだった時期がある。アテネ五輪の前年、予選のチケットを譲られたのがきっかけで、コンビニで「代表選手年鑑」を購入。それから毎週「サッカーマガジン」を買い続けた。おかげでJリーガーの身長・生年・出身校がソラで言えるようになり、かわりに建築のメモリーがだいぶ失われた。

そんな時期に、ドイツワールドカップ直前のミュンヘンへシンポジウムに呼ばれた。ヘルツォーグ・アンド・ド・ムロン設計のスタジアムが完成したばかりである。空港から市内へ向かう高速道路の脇に、真っ赤な風船状のスタジアムが見えてきた。つやつやとムラなく赤く発光している。この「アリアンツ・アリーナ」にはホームチームが2つあり、それぞれの試合がある日には、スタジアムがチームカラーの赤、または青にライトアップされる。試合のない日やホームゲーム以外の試合では、スタジアムは白いままである。建築の中で起きていることが外壁全体のメッセージになる。イレモノであることに徹した外壁は潔く、空気膜のフィルムだけで覆われた単純な立面は未来を引き寄せているように見えた。

シンポジウム翌日のエクスカーショにスタジアム・ツアーが組み込まれていた。メイキング・ビデオでは、たくさん並んだミシンで、ひとつひとつフィルムがひし形の袋状に縫い上げられていく。そのフィルムの袋をフレームに固定し、またひとつひとつに空気を入れる。ぷわーんと膨らんでいくスタジアムを大勢の職人が見守る映像は、テクノロジーよりも人手を意識させつつ、あくまでも軽やかであった。

ライトアップのデイテールはとてもシンプルだった。風船ひとつひとつのフレームの下部に、赤と青のセロハンを張った、3本の蛍光灯入りボックスが取り付けられていた。空気を送るチューブもそれぞれの風船に取り付いている。例外なくひとつずつの繰り返し。個々を電氣的に制御するプログラムの複雑さが、ミシンで縫って取り付けるといったシンプルな行為の前で存在を消していく。複雑な思考と軽やかなステップ。サッカーを包むのにふさわしい表層なのかもしれない。*



左—アリアンツ・アリーナの風船内部の
空気チューブと照明ボックス
右—風船の外観



全景（写真提供：アリアンツ火災海上保険）

きどさき・なぎさ——建築家／1984年、芝浦工業大学大学院修士課程修了。1984～85年、磯崎新アトリエ。1985～93年、伊東豊雄建築設計事務所。1993年、城戸崎和佐建築設計事務所設立。
主な作品：ピーナツハウス（1994）、鈴木木材工業本社（1997）、チウクウ（2001）、ガボンの魚市場（2002）、ヨウキ（2005）など。